

(別紙2)

審査の結果の要旨

氏名 岩谷 舟真

本論文は、集団規範の生成・維持メカニズムについて、「多元的無知」の概念を軸として検討したものである。従来、多元的無知とは「集団の多くの成員が、自らは集団規範を受け入れていないにもかかわらず、他の成員のほとんどがその規範を受け入れていると信じている状況」と定義されてきた。しかし、多元的無知の状況が集団レベルで維持され、一つの社会現象として成り立つには、成員間の認知のズレという側面にとどまらず、個々の成員が自身の選好に反して、他者が受け入れている（と信じる）規範に従った行動を採用するという行動的側面も重要である。本論文はこの観点に立ち、成員の認知と行動の連鎖に焦点を当てることによって、成員に支持されない規範が維持・再生産されるプロセスを実証的に解き明かすことを試みている。

論文構成は、研究の課題と目的および論文構成を示した序論と、それに続く第1～4部から成る。第1部では個人レベルの認知と行動に焦点を当て、個人が自らの選好に反して他者の行動に追随するとき、他者の選好に対してどのような推測を行っているかを、二つの実験室実験および一つの継時的調査に基づいて検討する。第2部では個人レベルから集団・社会レベルへと視点を広げ、集団規範の維持に影響を与える環境要因として社会の「流動性」に着目した検討を行っている。流動性とは、集団間の移動のしやすさと、その帰結としての集団成員の入れ替わりの頻繁さ、新たな他者と関係を取り結ぶことの容易さを意味する。論文では、社会の流動性の高低に応じて「評判」の果たす役割が異なり、規範遵守行動に異なる影響を及ぼしていることが論じられる。具体的には、二つの社会調査に基づき、流動性が低い社会では規範を逸脱した際の評判低下可能性が過大に推測され、これが個人の規範遵守行動を促すとの指摘がなされる。第3部では、集団間移動のしやすさは社会的要因のみならず個人の能力に拠っても異なるとの仮定に基づき、高いパフォーマンスをあげている個人ほど集団間移動が容易である（移動先の集団に受け入れられやすい）ため、逸脱行動を抑制する度合が小さくなる、との仮説を実験室実験によって検証している。最後に第4部で、各実証研究を貫く総合考察が行われる。

本論文は、規範・評判・多元的無知といった諸概念の定義の甘さ、理論的・実践的貢献に関する加筆の必要性、得られた知見を現実の社会問題の理解に生かすうえで解決すべき問題の存在等、複数の課題を残している。しかし、現象の記述にとどまっていた先行研究の限界を超えて、他者の選好や評判に関する誤推測が不本意な規範遵守行動の連鎖をもたらすプロセスを描き出した点、また、マイクロな個人の認知や行動とマクロな社会環境との相互規定関係を扱った点には、高い独創性と学術的価値が認められる。よって、審査委員会は本論文が博士（社会心理学）の学位に値するとの結論に達した。